

時々思い出すこと

うちの長男が、京都総本山光明寺での2年間の修行を終え無事3月1日下山いたしました。それもつかの間、今、中国を旅行しています。

「初めての海外旅行がなぜ中国？」と思うのですが、幼少から少林寺拳法をしているので特別な思いがあるのかも知れません。実は私の初めての海外旅行も中国でした。彼と同じ20歳



(1980年)の12月でした。

1977年に終結した

「文化大革命」から3年が経過した年です。今と違って中国への渡航は自由ではなく、私は「佛教友好団」の一員として旅行しました。つまり「お客様」です。毎食豪華な食事、外国との交易が少なかったせいか、デザートなどに輸入した果物などの食材が一切登場しないという、ある面では純粋な中国を体験したのかも知れません。反面、現地通訳男女一名ずつが付き、彼らが同行していないと自由に街中を歩けないとか、向こうが用意した小学校訪問等の公式行事に出席しなければならないなど、わずらわしさもありました。寺院に参拝しましたが、御堂内の石畳には一面豆が干してある状態でした。「文化大革命」の爪痕が残っていました。

北京に降り立って最初に驚いたのが、全員が「人民服」を着ている光景です。そして北京中心部でさえも乗用車はめったに見ることなく、おびただしい数の自転車に乗る人です。当時、中国で自転車を買うことは、日本でカローラを買うこと同様のことと通訳の人が説明し

ていました。食事、ホテル、買い物、列車移動など、外国人旅行者と現地民が交わらないような配慮が徹底的になされていました。マイクロバスの車窓から見る現地の方は、どこか目力が無いようであるような、「今自らが何を考えているのか悟られまい」、とう沈黙の表情でした。勿論、街中大声で話している人もなく、現在、京都など日本の観光地で闊歩している中国人旅行者の振る舞いを思うと、同じ民なのか不思議に思う時があります。「文化大革命」の10年間でどれ程辛いものだったのでしょうか。

高倉健似の男性の通訳が私に語りかけてきました。「3日前に、北京中心部にある公園の凍った池で、近くの小学校の女性教師がスケートの授業をしていました。すると氷が割れ女の子が池に落ちました。するとたちまちに人だかりとなり、女性教師と大勢の人々の間で救助に対する値段交渉が始まり大騒ぎになりました。その間に女の子は残念な結果になりました。中国とはそういう国であることを将来忘れないでください。」当時、外国人である私にこんなニュースを語るのはご法度です。彼はエリートだと思います。あえて若い私だったからこそ語ってくれたのだと思います。この鉛のような言葉は、一生体から離れることはないでしょう。

現在、日本は中国と緊張関係にあります。彼が語ってくれたことをよく思い出します。旧正月には家族連れで中国人旅行者が多く来日しました。この旅行が良い思い出になり、子供たちが将来日本を好意的に思ってくれるようになることを願うばかりです。 俊徳丸